

(未来からの暗示) 書直し書庫版



子供の頃のことです。

夏休み、遊び疲れて帰ってきて、いつの間にか、八畳の間で寝入ってしまったようです。あの日は、お昼寝でもしよう、と思ったのかもしれませんが。

目が覚めると夕暮れ時でした。日が落ちかけていて、部屋の中は少し薄暗く、かなかな（＝日暮し蟬）が鳴いている以外は、物音ひとつせずにひんやりと静まりかえっていました。母は夕飯の総菜を求めて買い物にでも出かけたのか、おりませんでした。弟や妹たちも、まだ外で遊んでいるのかやはりおりませんし、ばあさんもいつも座っている茶の間にもおりませんでした。

その時、何故かふと、言いしれぬもの悲しさに襲われました。

その頃は、まだ宇宙というような抽象的な言葉は知らなかったと思いますが、その言葉を大人になって使うことが許されるなら、本当に「宇宙にただ独り」のような感じがしたのです。

この先、どこまで行っても、誰にも会えない。誰とも繋がれない。何か知らぬ間に、みんなとの糸が切れて、独り置いてきぼりにされたような、なんとも言えないもの悲しさ、さびしさ、おそろしさ。

僕は急に心細くなって

「ねえ、みんなどこ？どこにいるの？だれもいないの？」

と、大きな声を出しました。しかし返事はどこからも返ってきませんでした。

あれはなんだったのか？何故そうまで、はつきりと覚えているのか？

そして最近、思い当たりました。

あれは、その後の自分の人生に対するぼんやりとした「未来からの暗示」だったのかもしれない、など。

ひとがそうするのか、自分がそうさせてしまうのか、それはわかりませんが、うっすらとではあっても、影のようにつかず離れず付きまとう予感というものは「虫の知らせ」同様抱いた段階で、ほぼ確定と言えるほど、相当な確率で実現するもののようにです。